

## 2010年度 教養文化研究所 活動報告

### 2010年度教養文化研究所主催公開講座

#### 第1回

2010年6月24日（木） 11:00～12:30 於14階会議室

講師：嘉悦朗氏 「日産自動車のV字回復に見られる組織風土改革  
そしてプロスポーツ経営」

#### 第2回

2010年11月26日（金） 15:00～16:30 於7405教室

講師：坂下善英氏 「佐渡の観光振興とスポーツツーリズム」

#### 第3回

2010年12月15日（水） 13:20～14:50 於14階会議室

講師：鈴木泰之氏 「多様性の大切さ 一日本人と中国人の隣人としての  
付き合い方」

### 教養文化研究所・研究懇話会

#### 第1回

2010年4月29日（木）

天野宏司 「鉄道事業者による沿線イベントと旅客誘致に関する  
ケーススタディ」

#### 第2回

2010年6月24日（木）

伊藤雅道 「ビオトープの創生過程とホテル導入について」

#### 第3回

2010年10月21日（木）

小林将輝 「H. C. アンデルセン『一詩人のパズール』における絵画的世界」

#### 第4回

2010年11月18日（木）

檜皮貴子 「高齢者の転倒予防体操に関する研究：  
体操の歴史的背景を踏まえて」

天野宏司 鉄道事業者による沿線イベントと  
旅客誘致に関するケーススタディ

鉄道事業者は、鉄道敷設と平行して住宅地の整備やレクリエーション施設の整備などの沿線開発を行い、旅客誘致を企図してきた。日本における観光ブームが戦間期に発生したのは、郊外鉄道が敷設され、その沿線開発の結果といえる。しかしながら、近年の傾向として、マスツーリズムの浸透、バブル期の大規模開発への自省、少子高齢化、健康志向の上昇などに対応して、従来とは異なる旅客誘致策を採る必要が生まれてきた。このため鉄道事業者はさまざまな沿線イベントを展開するようになった。代表的なものとしては、鉄道事業者自身が装備する鉄道車両や車両基地を開放・公開するようなタイプで、いわゆる鉄道ファンに対する訴求力が強いイベントである。もうひとつが、沿線の観光資源を利用しつつ旅客誘致を図るタイプで、ウォーキングなど、広く訴求するものが実施される。

本報告は、2009年度に教養文化研究所共同研究費の提供を受け、天野と平井純子の両名によって遂行された共同研究の中間報告にあたる。その目的は、①旅客誘致イベントへの参加者の空間的分布(集客圏)の把握、②イベント参加者の属性分析、③旅客誘致イベントの効果測定を行うことである。

沿線イベント中、通年で展開可能なウォーキングイベントに着目し、西武鉄道株式会社を対象に分析を行った。西武鉄道は、池袋線が2012年に副都心線を介してみなとみらい線への直通運転が予想され、これにより2013年以降、集客圏が変化する可能性が考えられる。この比較をするための基礎資料を収集することも目的のひとつである。

2009年度中に西武鉄道では計69回のウォーキングイベントを実施し、この延べ参加者数は95,875人であった。西武鉄道では、ウォーキングイベント参加者に対し、「西武沿線ポイントカード」を発行し、イベント毎にポイントを付与している。カード保有者は、ポイントを一定数累積すると、pasumoへ1,000円分のチャージが行われるサービスが展開されているため、リピーターの確保にも貢献している。本研究では、この「西武沿線ポイントカード」の利用履歴の提供を西武鉄道から受け、この分析によって上記課題の解明を試みた。ちなみに、ポイントカードを保有する

参加者の延べ数は52,026人と、全参加者の52.0%を占め、補足率は充分と考える。ポイントカードから得られる情報は、①カード固有 ID、②居所、③性別、④年代の4情報で、これを G. I. S. (地理情報システム)の手法を用い分析した。

結果、①イベント毎の分布に大きな差異は生じていない、②千曲市・新潟市・盛岡市・気仙沼市・下田市・三島市など、遠隔地からの参加者が確認される、③総じて50～70代の参加者が多いがイベントのテーマによって若年層の割合が上がる場合があることが確認された。分布に差異が現れない理由としては「西武沿線ポイントカード」保有者に限定された分析であり、必然的に「沿線」住民のみが抽出されている可能性があり、全数調査が必要と考える。また、遠隔地からの参加者に対しては、参加動機やイベントの開催情報の入手経路などを問うたアンケート調査が必要であろう。

2010年から13年3月まで、駿河台大学と西武鉄道株式会社との間で挙動研究に関する協定を締結し、今後の研究の深化に備えることとなったことを付記し、中間報告を結ぶ。



小林将輝 「H. C. アンデルセン『一詩人の  
バザール』における絵画的世界」

ハンス・クリスチャン・アンデルセンは一般に童話作家として知られているが、生涯を通じて30回もの旅行を行い、幾つもの旅行記を出版した「旅をする作家」でもある。本発表では1842年に出版されたヨーロッパ、オリエント地域の旅行記『一詩人のバザール』を取りあげ、アンデルセンがその旅行体験を旅行記というテキストで表現するさいに、読者にその場面を視覚的にイメージしやすくさせるような文章表現上の技法を取り入れていることについて報告をした。

この表現上の技法とは、以下の3点に要約できる。(1)視覚的描写を長い叙述によって過剰に行うような「絵画や写真の情報量を内含するもの」、(2)絵画やそれに類する表現を多用し、「絵」そのものを印象付けようとする「読者に絵を喚起させる効果を持つもの」、(3)歴史的な内容や幻想的な内容を盛り込んで、読者の想像力を掻きたてるような「詩的イメージを付与するもの」である。『一詩人のバザール』では、これらの文章上の技法によって、読者は文章を目で追いながら、アンデルセンが体験した異文化を視覚的イメージ豊かに追体験できるものとなっている。

発表後の質疑応答においては各所員から様々な意見が出された。中でも活発な議論の対象となったのは、19世紀のヨーロッパ、とりわけ英国においては *picturesque* という言葉が理論化されたように、旅行者が風景を絵のように表現することはひとつの作法のようなものであり、その意味でアンデルセンの旅行記も広くヨーロッパの旅文化の文脈でとらえ直す必要があるのではないかという主旨の指摘であった。

この指摘は非常に示唆的であり、ヨーロッパの同時代の旅行文学における風景を絵画的に捉える文化的・歴史的な傾向は、それぞれの国の文学史上の固有性も視野に入れながら十分に検討する必要があるだろう。また、そのような文化的背景を踏まえたうえで、アンデルセンという作家がどのように自身の体験を「絵画的に」文章化しているのか、その文章技法の独自性を浮き彫りにさせることも求められるだろう。

それに加えて述べるならば、上記のような比較文化・文学的な因果的関連や作家独特の文学上の素養という点だけではなく、同時に旅行記という実体験と記述が密接に結びついたテキストが本来持つ、その独自の文学のありようにも注意を払う必

要があると考え。私が見る限り、アンデルセンは自身のあらゆる旅行体験を——異文化に接するさいに生じるとまどいや不安な感情も含め——要領よく心地よい物語に回収してしまう傾向がある。しかし、異文化体験を言語化するということの困難は、おそらくそんな「こなれた」アンデルセンの旅行記にも、どこかにその徴候が見出されるのではないだろうか。

檜皮貴子 高齢者の転倒予防体操に関する研究  
：体操の歴史的背景を踏まえて

日本における体操の歴史は、近代学校体育の歴史と共に歩んできたと言っても過言ではない。明治5年学制の公布時に「体術科」が設置され、翌6年には名称が「体操科」に変更された。その後、昭和16年「体練科」の設立に伴い体操は科目の一つとなったが、軍事的強化が図られていた日本において「体操」は重要な役目を担っていたと考えられる。

敗戦を迎えた日本は、教育制度も一掃され「体練科」は廃止され「体育」という新しい教科が置かれた。体育の内容は、球技を中心した運動種目が主であったが、体操も運動種目の一つに残された。平成10年、「体操」の主な実施内容であった「体力を高める運動」に加え「体ほぐしの運動」が盛り込まれたことにより、「体づくり運動」に名称変更された。この「体づくり運動」では、柔軟性や筋力、持久力などを高める運動の実施だけでなく、「体への気付き」、「体の調整」、「仲間との交流」を目指した律動的な運動内容が加えられた。すなわち、現代の学校体育において「体操（体づくり運動）」には、手段としての運動内容にとどまらず、動くことそのものの楽しさや心地よさを味わう取り組みも期待されていると理解できる。体操領域の概念の拡大は、学校教育の枠を超えて、幼児や成人、さらには高齢者を対象とした体操においても同様のことが言えよう。

日本における急速な高齢化に伴い2000年「介護保険制度」が厚生労働省管轄のもと開始された。その後、要支援・要介護者数が急激に増えたことで、2006年「介護保険法」は改正された。それを機に「予防介護」が注目され、寝たきりを引き起こす「転倒・骨折」の予防に関する研究も数多くなされるようになった。

高齢者を対象とした転倒予防の研究では、様々な介入運動が実施されている。ここでは、「筋トレ」と呼ばれる反復形式のエクササイズが一般的である。リース・ドルプは、このような運動を「媒介運動 (Intermediaere Bewegung)」と呼び、絶縁的動作が反復練習されるのであって、「私は運動したい」と言う内的衝動が欠落していると言及している。

一方、これから目指されるべき運動内容は「環界とのたえざる積極的な対峙の中」で実施され、高齢者自身が主体的に取り組むことができる体操プログラムと考える。

例えば、安全を配慮した上で、ぐらぐらと足元が揺れるアンバランスな状況を提供し、この環境との対峙を前提にした体操を楽しむことである。その結果、自然に転倒予防になる動作を身につけて行くと思われる。更に、仲間と共に、リズムに合わせて、歌いながら、笑いながら実施できたら、体操内容はそのこと自体により意味を持つようになると思う。

最後に、「体操（体づくり運動）」の担う役割は、豊かな身体文化を継承しつつ、常に変化する時代のニーズに応じて、笑顔溢れる運動内容を創造し続けることであると思う。